

## 吉野諒三先生を悼む

日本世論調査協会会長

鈴木 督久

吉野諒三先生が突然、お亡くなりになった。前日まで関係者に電子メールを出し、日記も書かれていた。英文書籍の出版に向けた原稿に専念していた。仮題は、Scientific Public Opinion Polling in Japan – Its History, Theory & Practice. これが絶筆となった。戦後日本の世論調査を世界に発信する狙いだった。日本世論調査協会の活動総集という性格もあった。無念である。

吉野先生（1955-2024）は University of California, Irvine において数理心理学で学位を取得して帰国後、統計数理研究所に入所（1989年）。ここから林知己夫（1918-2002）との仕事が始まった。数理心理学の研究者を目指していたが、林グループの国民性調査、国際比較調査などの調査プロジェクト、特に後者で中心的な役割を果たす結果となった。

林との出会いについて、吉野先生は講演でも言及していた。正確な表現は再現できないが、ひとかどの研究者になったつもりで米国留学から戻ったのだが、それが吹き飛ばすような、目から鱗が落ちるような衝撃を受けた。林が何をどう述べたのか、具体的内容は知らないが、そのような趣旨だったと思う。吉野先生の人生にとって「事件」であったことは間違いない。しかし吉野先生は、そのことは何より重要であると心の底から実感したからこそ、その後の論文等でも繰り返し、論点として強調した。世論調査に関しては「科学的」方法論であり、より一般的には、理論だけでなく実践を等価に位置付ける態度であった。また、実務家に対して敬意を持っていた。若手が巨匠から厳しい指摘をされた時、反発・沈没・無視・面従腹背などの反応もあると思うが、吉野先生はいずれでもなく、林を尊敬した。それは吉野先生の資質だったと思える。

比喩として適切ではないかも知れないが、巨匠とは古今東西よく分からない存在で、弟子は巨匠の言葉をそのまま伝える。親鸞に対する唯円、孔子に対する論語の著者、イエスに対する使徒。

林にも分かりにくいことが多くあった。いくつもの例を指摘できるが、吉野先生は林の言葉をそのまま伝えるだけでなく、伝わるように解説することに努めた。林の代弁者ともいえるだろう。私たちは吉野先生の解説ではじめて理解を深めることができた。たとえば「ユニヴァースとポピュレーション」の区別を林は強調した。調査対象集団と母集団の区別の説明はひとまず理解できるが、それ以上の納得と共感は、私には難しかった。林が哲学的ときには文学的表現を使うためでもある。「最初の言葉・最後の言葉」は多変量解析法の分類（外的基準の有無）で使った。林は寺田寅彦だというのが、実は違っていた。しかし、そんなことより表現に込めた真意が重要で、吉野先生はそういう背景を解説できた。有名な「林の数量

化法」も狭義には「理論的發展はない」と述べたうえで、吉野先生はその哲学・精神のポテンシャルを訴えた。

吉野先生は水野坦 (1917-2003) も尊敬していた。「林は水野の代弁者のようなところがある」あるいは「二人の天才」と私に述べたことがあった。数量化の考え方 (広義の) や標本抽出調査などは、1950 年代初には確立され著書も出していたが、そのアイデアは水野に触発されたものだという。林は水野を尊敬していた。そして吉野先生は二人の哲学と共振まで見抜いていた。

以上は吉野先生の素描ではあるが、あくまでも私の個人的・主観的な感受で吉野先生の側面の一面に過ぎない。統計数理研究所において吉野先生と共同研究を続けてきた近しい人々からは、また異なる追悼もあるだろう。

吉野先生は 2024 年 6 月 4 日、日本世論調査協会の理事会において会長辞任を表明した。一期二年での辞任は異例だが、健康上の理由ということであった。お変わりないように拝察したが、発言はなく無理をなさって出席して頂いていたのであろう。翌 7 月 27 日に急逝されたのである。

今から思えば、各所からの原稿依頼、査読、各学会の委員要請などが続いていたが、ほとんど辞退されるようになっていた。頼まれたことを全部引き受ける余裕はなかった。同志社大学を辞めたのも時間が惜しい、という理由だった。その姿は生き急いでいるようにも見えた。冒頭に記した英文書籍は、私を含めて複数で協力する予定であったが、私たちの力不足もあって、吉野先生に単独で執筆して頂く結果となり、協力できなかった非力が悔やまれる。「体調や寿命を考えながら残りの仕事を仕上げたい」。不吉なことを、とっていたが、本心なのであった。「残りの仕事」とは、数理心理学である。吉野先生は統計数理研究所で二人の天才の手伝いをする事にならなかつたら、数理心理学者として違うキャリアを積まれたと思う。1 冊の著書は出版されたが、調査プロジェクトが優先されてきたのだと思われる。数理心理学と青春の米国留学。最後はそこに戻りたかったのだと思う。この数年は当時の教授陣との再会を含めて、渡米を強く望んでいた。しかし、その機会は遂に訪れないまま、人生は突然の中断となった。

吉野先生の霊よ 安らかなれ